**護法石（弁慶のお手玉）**

この二つの苔で覆われた岩には2つの伝説がある。最初の伝説によると、不動明王と毘沙門天の子供の姿の化身である乙天と若天は、圓教寺の開祖性空上人（910-1007）が966年に最初に書寫山に到着したときに天からこれらの石の上に降り立った。乙天と若天は性空上人の初期の修行を助けた。乙天と若天は、護法善神（サンスクリット語：ダルマパーラ）、または仏教の教えの獰猛な守護神として知られ、二つの石はこの伝説から、「ダルマパーラの石」と呼ばれるようになった。彼らは圓教寺の守り神として、千年以上に渡って、お寺の伝説や伝統に登場してきた。

これら二つの石は、伝説的僧兵である武蔵坊弁慶にちなんで、「弁慶のお手玉」としても知られている。弁慶に関しては多くの伝説や逸話が残されているが、彼は少年時代、圓教寺で修業したことが知られており、この歴史的事実が多くの物語を作り出した。伝説によると、若い時、弁慶は二つの岩でお手玉をして自分の力を試した。ほかの話では、弁慶が仲間に嘲笑されたときに起きた争いについて伝えている。弁慶の激烈な報復は、1331年に圓教寺の主要な建物を焼き尽くした大惨事を引き起こしたと言われている。